

論文の内容の要旨および論文審査の結果の要旨

学位申請者氏名: 梅原 里実 学位の種類: 博士(保健福祉学)

学位記番号: 博(健)甲第28号 学位授与年月日: 令和4年3月3日

指導教員名: 高崎健康福祉大学教授 安達 正嗣

審査委員: 主査 高崎健康福祉大学教授 永田 理香

副査 高崎健康福祉大学教授 神田 清子

副査 高崎健康福祉大学教授 上原 徹

論文題目

看護師のセルフ・エンパワメントの形成過程に関する研究

— 認知症患者を対象とする看護の特性から —

A study on the formation process of self-empowerment of nurses

— From the characteristics of nursing for dementia patients —

【論文の内容の要旨】

増加する認知症患者を取り巻く医療における課題には、身体抑制や意思決定支援をはじめとした倫理的課題を多く含んでいる。認知症は疾患の進行とともに認知機能の低下に伴い、言語機能の低下が起こるうえ意思疎通が図りにくく対応困難となる。また、加齢による変化や基礎疾患があることが重なり、個別の対応が必要になることから解決が一層困難となっている。また臨床における同意のない、行動抑制については即廃止の声が上がり 20 年以上が経過しているが、現在も解決困難な状況として課題は残ったままである。医療における意思決定支援についても同様の状況であり個人の尊厳が脅かされている。看護師はこの状況を打開する手立てがなく困難感や無力感を感じているものと推測される。

本研究では、看護師が認知症患者に対する正しい理解と共に、困難感を低減する知識の習得により看護師本来の能力を発揮し、認知症看護の発展に寄与につながるものと考えている。認知症患者の特性を捉えた活用可能な研修モデルを構築するために、従来のエンパワメントの理論を基本に、認知症看護の実践者である、看護師のセルフ・エンパワメントの形成過程となる意思表出を促すセルフ・エンパワメントモデルに沿った研修を実施し、看護師のパワーレスネスの低減の有無を量的調査より考察した。また、看護師のセルフ・エンパワメントに影響を与える関連要因と、そのセルフ・エンパワメントの形成過程が、所属する組織エンパワメントに、影響を与える要因を明らかにし、セルフ・エンパワメントモデルの作成を目指すための示唆を得ることを目的としている。

「第1章」では、先行研究のレビューを通じて、エンパワメントの研究背景から、対象のレベルと領域を検討した。また、パワーレスネス状態になっている看護師に対して、エンパワメントするには、本来持っている能力を発揮できるよう動機づけが必要となる。認知症患者の理解力低下、及び言語機能の障害によって、自己の意思や主張を周囲に伝える手段が乏しい現状がある。その現状の中でケアする看護師自体が患者の感情を読み取ることに對して、意識できない共感不足が要因となり、認知症看護に困難を感じ、看護師自身がパワーレスネス状態にい

たっていると推測した。共感とは、看護師が患者の意思や感情を知ろうとする、情緒の共有である。したがって、看護師と患者の関係形成において共感性は他者の感情に心を寄せ、この共感が意思疎通の困難な認知症患者に対する支援となり、重要な要素と考えられており、相手の感情を解ろうとする共感に焦点を当てることにした。また自己効力感を高められる学習モデルを用いた内的動機づけとして、外部講師による研修を実施する看護師のセルフ・エンパワメントモデルの試作を検討した。

「第2章」では、一般病院に勤務する認知症看護の実践経験において、パワーlessness状態の看護師を対象に、看護師のセルフ・エンパワメントモデルを基にした研修を実施した。研修内容は、患者の価値観の共有に努め、意思表示を促すコミュニケーションについて小人数制の講義形式と対話型とし、基礎編と応用編の2回に分け実施した。その効果の検討には、看護師のセルフ・エンパワメントに及ぼす影響（困った事、情けなさ、無力感、不安感、緊張感、いらいら、苦しさ、うれしかった事）と、共感性について、研修前後の比較を行った。その結果、特にイライラ感や緊張といった項目で有意性が高く、ケアに伴う易刺激性の軽減効果が示唆された。4つの類型の中で対人関係そのものが弱く共感性が最も低い両貧型は、対人関係そのものが増える両向型や共有型、不全型へと変化し、研修後の類型が有意に減少した。しかし、真の意味での自己理解、他者理解につながる両向型の増加や、SSEとSISEの有意上昇は示されておらず、本研修による真の共感までには至らなかったことが示された。一方、共有経験と共有不全経験の両者が低い両貧型の割合が減少した結果から、研修終了後約2週間という短期介入でもセルフ・エンパワメントの初期段階は達成されることが示唆された。概括的な共有経験に加え、看護師が体験している困難を感じた事例に対し、気持ちがわからなかった共有不全経験を意識できる教育研修を検討し、さらなる修正を重ねることを今後の課題とした。（研究1）

「第3章」では、研究1の結果を受け、パワーlessness状態にあった看護師のセルフ・エンパワメントに影響する要因について、研修後共感類型が変化した11名のうち、協力を得られた7名の看護師の語りから質的帰納的分析を行った。その結果、認知症看護を行う看護師のセルフ・エンパワメントに影響した要因には、認知症患者に対する、感情や思い込みを前提とし、認知症患者への意思表示を促すケア時の態度の変化と共に、意思表示を実践することによる、看護師自身が変化する、内発的な動機付けが生じていた。さらに看護師の内面に生じる自己知覚などが相互に関連していることが示唆された。（研究2）

「第4章」では、研究2の結果を受け、看護師のセルフ・エンパワメントが、組織エンパワメントに与える影響と関連する要因について、看護師が所属する3名の看護師長の語りから質的帰納的分析を行った。その結果、セルフ・エンパワメントモデルのプロセスにおいて具体的な組織エンパワメントに影響する要因が生成されていた。また、組織エンパワメントに影響する要因には職場の課題に向き合い、共に考え、行動する職場文化が有ったことが示された。看護師個々の成長を促進し事実に基づく確承認や、報告しやすい職場環境などは、看護師の行動変容につながり、組織エンパワメントに継続して影響を与える要因と考えられた。以上の結果をふまえて、試作した看護師のセルフ・エンパワメントモデルの修正に至った。（研究3）

「第5章」では、本研究のまとめとして総合考察を行った。まずセルフ・エンパワメントのモデルに沿って実施した研修の、セルフ・エンパワメント形成への有用性について述べた。次に、セルフ・エンパワメントへの影響と、組織エンパワメントへの影響について、明らかとなった知見について考察した。認知症看護に困難を感じ、パワーlessness状態の看護師への、セルフ・エンパワメントモデルの応用可能性については、本研究で明らかとなった看護師のセルフ・エンパワメントと、組織エンパワメントの影響の関連要因をふまえて課題を中心に考察した。以上

の考察から、認知症患者の共感を中心とした意思表示を促す実践は、看護師のセルフ・エンパワメントの初期段階の形成に影響し、セルフ・エンパワメントの形成による看護師としての自律行動による実践の変化がチームの一体感を生み、組織エンパワメントを促進すると申請者は結論づけている。

【論文審査の結果の要旨】

学位申請者の梅原里実氏は、現在、本学保健医療学部看護学科准教授として、ならびに老年看護学の専門家として数多くの学会報告や論文執筆をおこない、日本老年看護学会、日本保健医療学会、日本医療福祉学会等の学会誌に本研究テーマに関する論文が掲載されている。また、一般急性期病院の看護師長、日本看護協会認定認知症看護認定看護師等としての豊富な実務経験に加え、日本看護学会学術集会抄録選考委員会、日本転倒予防学会理事、群馬県認知症看護認定看護師会役員などといった要職に就いて、関連学会等においても精力的に活動している。

本研究は認知症ケアにかかわる看護師の直面する困難な課題に焦点を当て、エンパワメント概念を援用した研修モデルを構築し、それに基づく介入効果を質問紙調査および質的分析を用いて検証したものである。独自性の高いテーマであり、新型コロナウイルス感染症の状況下であることに鑑みても、意義ある内容と高く評価できる。

博士論文審査会（令和4年1月20日）では、2時間以上にわたり、要旨についてのプレゼンテーションの後、3名の審査委員との間で活発な質疑応答ならびに議論がおこなわれた。審査委員は、それぞれの専門的な観点から当該博士論文に対して質問や意見を提示し、論文中使用されている用語の定義の明確化、セルフ・エンパワメントモデルに基づく研修介入効果の検証方法、共感力の変容に関するEESR概念に基づく考察の不足等に関しての指摘があがった。また、研修設計に関するID（Instructional Design）理論や研修転移等の教育学の援用についても示唆された。

修士論文・博士論文発表会後に提出された修正論文においては、上記の指摘を踏まえ適切な考察が加えられた。今回の研究では、自己理解、他者理解につながる両向型の増加や、SSEとSISEの有意上昇は示されず真の共感までには至らなかったが、共有経験と共有不全経験の両者が低い両貧型の割合が減少した結果から、研修終了後約2週間という短期介入においてもセルフ・エンパワメントの初期段階は達成されることが示唆された。また、今後の課題として、他者と自己との個別性の認識を高め、他者の気持ちがわからなかった共有不全経験を意識できる研修プログラムの構築や、病院組織や高齢者施設などへの研修対象者の拡大について言及された。

以上により、論文審査および最終試験の結果に基づき、審査委員会において慎重に審査した結果、本論文が博士（保健福祉学）の学位に十分値するものであると判断した。